平成 28 年3月 14 日
総則・評価特別部会
資料8

言語能力の向上に関する特別チーム

〇言語能力の向上に関する特別チームにおける検討事項

〇言語に関する資質・能力（検討のたたき台）

〇言語に関する資質・能力の要素（イメージ案）

〇言葉の働き（機能）と仕組みについて

〇言語能力を向上させるための、国語科と外国語活動・外国語科の効果的な連携の在り方について

〇小学校における国語科と外国語活動・外国語科の連携について（イメージ案）

〇国語教育と外国語教育の連携に関する効果・課題・今後の方向性に関する示唆等（例）

〇言語能力について（整理メモ）

平成２７年１０月２２日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料8－1

言語能力の向上に関する特別チームにおける検討事項

１.「国語科」及び「外国語科・外国語活動」を通じて育成すべき言語能力について
・育成すべき資質・能力の可視化について
ｉ）何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
ⅱ）知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）
ⅲ）どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）
・他教科における言語能力の育成との関係について

２．言語能力を向上させるための、「国語科」及び「外国語科・外国語活動」における指導内容の系統性について
・目標・指導内容（当該教科において育成すべき資質・能力）等全体に関して
・言語の仕組み（音声、文字、語句、文構造、表記の仕方等）に関して

３．言語能力を向上させるための、「国語科」及び「外国語科・外国語活動」相互の連携について
・目標・指導内容（当該教科において育成すべき資質・能力）等全体に関して
・言語の仕組み（音声、文字、語句、文構造、表記の仕方等）に関して
・ローマ字学習の取扱いについて

４．効果的な指導の在り方について
・教科担任制の中・高等学校における連携の在り方
・短時間学習の活用
・ＩＣＴ等の活用

言語に関する資質・能力（検討のたたき台）

個別の知識や技能

○言葉の働き、役割に関する理解

○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け
- ・言葉の位相、書き言葉（文字）、話し言葉
- ・語、語句、語彙
- ・文の成分、文の構成
- ・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章の関係） など

○言葉の使い方
- ・話し方、書き方、表現の工夫
- ・聞き方、読み方

など

○言語文化に関する理解

○既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）

思考力･判断力･表現力等
教科等の本質に根ざした見方や考え方等

◆テクスト･情報を理解する力、文章や発話により表現する力

【創造的思考（とそれを支える論理的思考）の側面】

➢**情報を多角的に精査し、構造化する力**
- ･論理の吟味･構築（根拠、論拠、定義、前提等）
- ･信頼性、妥当性の吟味
- ･推論に基づく情報の精査･取捨選択
- ･既有知識による内容の補足、精緻化

➢**構成･表現形式を評価する力**

【感性･情緒の側面】

➢言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力

➢**構成･表現形式を評価する力**

【他者とのコミュニケーションの側面】

➢言葉を通じて伝え合う力
- ･相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
- ･相手の心の想像、意図や感情の読み取り
- ･自分の考えや思いの伝達

➢**構成･表現形式を評価する力**

◆考えを形成、深化する力

➢**情報を編集･操作する力**

➢**新しい情報を、既に持っている知識や経験･感情に統合し**構造化する力

➢**新しい問いを立てるなど、既に持っている考えの構造を転換**する力

学びに向かう力、人間性等
情意、態度等に関わるもの

･言葉のもつ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度

･言葉を通じて、自分のものの見方、考え方を深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団の考えを発展させようとする態度

･様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にするとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通じて、心を豊かにしようとする態度（自分の感情をコントロールしようとする態度）

･言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度

･歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化に対する関心

平成28年3月3日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料2

言語に関する資質・能力の要素（イメージ案）
～「国語科」及び「外国語科・外国語活動」を通じて育成すべき言語能力～

認知から思考へ

テクスト（情報）の理解

構造と内容の把握
○言葉の働き、役割に関する理解
○日本語や外国語の特徴やきまりに関する理解と使い分け
・言語の位相、書き言葉（文字）、話し言葉
・語、語句、語彙
・文の成分と文の構成
・文と文の関係、段落、段落と文章の関係
○言葉の使い方
・話し方、聞き方、表現の工夫
・聞き方、読み方
○言語文化に関する理解
○既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）

精査と解釈
【創造的思考（とそれを支える論理的思考）の側面】
➢情報を多角的に精査し、構造化する力
・論理の吟味・構築（根拠、論拠、定義、前提等）
・信頼性、妥当性の吟味
・推論に基づく情報の精査、取捨選択
・既有知識による内容の補足、精緻化
➢構成・表現形式を評価する力
【感性・情緒の側面】
➢言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
➢構成・表現形式を評価する力
【他者とのコミュニケーションの側面】
➢言葉を通じて伝え合う力
・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
・自分の考えや思いの伝達
➢構成・表現形式を評価する力

自分なりの整合性のとれた考えの形成
➢情報を編集・操作する力
➢新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
➢新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

表現 ／ 構成・表現形式の検討 ／ テーマ・内容の検討 ／ 考えの形成、深化

推敲
○文章の推敲
・構成・表現形式の修正
・内容の再検討、考えの再整理
○発話の調整
・相手に配慮した表現
・相手の視点を考慮した展開

文章や発話による表現

思考から表現へ

言葉の働き（機能）と仕組みについて

平成２７年１月１３日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料4

言葉の働き（機能）

◆日本語も外国語も、言語として、同じ言葉の働き（機能）を持っている。
（ヤコブソンの６分類）　※理論的に区分した分類であり、実際の言語活動は、複数の機能を同時に果たしている。

【主情的機能】
心や身体の状況変化を外部に表出する機能。
Ex. 感嘆詞、間投詞など。

【詩的機能】
具体的な内容を伝達することよりも、メッセージそのもの（音の響き、リズム、形態、統辞、語彙など）に着目した機能。

【働きかけ機能】
相手に訴え、相手を動かす機能。聞き手を何らかの行動へと駆り立てる、一種の働きかけ。

【交話的機能】
言葉を交わし合うこと自体が、互いの心を通わせ、一体感を高める働きをすること。
Ex. 挨拶、相槌、井戸端会議

【指示的機能】
内外の環境世界を、言葉という手段を使って解釈し、描写し、記録する機能。

【メタ言語的機能】
本来、事物や事象などの対象を語る「オブジェクト言語」に対して、言語そのものを語る機能。

（参照：「言語とメタ言語」R.ヤコブソン（池上嘉彦、山中桂一訳）　勁草社、「教養としての言語学」鈴木孝夫著　岩波新書）

※ヤコブソンの６分類は、対人コミュニケーションの場面における「言葉の働き」を整理したものであるため、この６分類のほか、内言語機能（思考のための内なる言語活動）があることに留意する必要がある。

◆国語の果たす役割、個人にとっての国語

①知的活動の基盤
・あらゆる「知識の獲得」と「能力の形成」にかかわるもの
・思考そのものを支えている
・論理的思考力や創造性の基盤

②感性・情緒等の基盤
・美しい日本語の表現やリズム、人々の深い情感、自然への繊細な感受性などに触れ、美的感性や豊かな情緒を培う

③コミュニケーション能力の基盤
・言葉や文字などによる意思や感情などの伝え合い
・「人間関係形成能力」や目的と場に応じて「効果的に発表・提示する能力」の根幹

（参照：「これからの時代に求められる国語力について」文化審議会答申）

◆「言葉の働き」に関する現行の学習指導要領における主な記載
【国語科（小学校）】
・言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。
・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。
【外国語活動（小学校）】
〔コミュニケーションの働きの例〕
相手との関係を円滑にする、気持ちを伝える、事実を伝える、考えや意図を伝える、相手の行動を促す
【外国語科（中学校、高等学校）】
〔言語の働きの例〕
コミュニケーションを円滑にする、気持ちを伝える、情報を伝える、考えや意図を伝える、相手の行動を促す

言葉の仕組み

◆日本語や英語をはじめとするそれぞれの言語は、共通の基盤である「言葉の普遍性」と、それぞれ固有の特徴（仕組み）である「個別性」を持っている。

○音声
・日本語の母音や子音と、英語の母音や子音には違いがある。
・それぞれの言語において、母音と子音を組み合わせた音節の作り方に違いがある。 など

○語（分節、ことばによる世界の切り分け方）
・単語は、日本語と外国語（英語）が一対一で対応しているわけではない。
【例】日本語の「水」は「湯」と区別して用いるが、英語では温度に関係なくwaterを用いる。
【例】着る･･･身に付ける動作と身に付けている状態の両方を表す、上着やワンピースに使う
wear･･･身に付けている状態を表す、上着やワンピースのほか眼鏡やヘアスタイルにも使う
・背景となる文化が語に影響を与えている。
【例】英語の“rice”に当たる語は、日本語では、「稲」「米」「ご飯」と複数ある。 など

○テクストの構造、語順、主語･述語･目的語等
・日本語と英語では、語順の自由度に違いがある。
【例】日本語： 太郎は、花子が好きだ。＝ 花子が、太郎は好きだ。
英　語： Taro likes Hanako. ≠ Hanako likes Taro.
・語順や区切りを変えることで、意味が変わることがある。
【例】警察官が、自転車で逃げた泥棒を追いかけた。／警察官が自転車で、逃げた泥棒を追いかけた。
赤い、ストライプのシャツ／赤いストライプの シャツ など

○テクストの文脈上の意味
・テクストの意味は常に一定ではなく、文脈（状況、場面、相手等を含む）によって変化するものであり、このことは全ての言語に共通する。
【例】（自宅で父親が母親に･･･） 父：「電話が鳴っているよ。」
※「電話が鳴っている」状況を描写したのではなく、「電話をとって欲しい」という依頼の意図が含まれている。
（道を歩いている時、友達に･･･） 友：「時計持っている？」
※腕時計をしているかを聞きたいのではなく、「今、何時？」という質問の意図が含まれている。
・使用者や文脈との関係によって、それぞれに適切な表現は異なる。
【例】英語においても、日本語の敬語表現とは異なるが、“Would you please ～？”等の敬意表現がある。
【例】人に名前を聞くときは、通常、“Who are you？”ではなく、“What's your name？”を使う。 など

○文字、表記の在り方
・言葉の表出は、音声と文字に分かれるが、文字を持たない言語もある。
・日本語は、平仮名、片仮名、漢字の３種類の文字を混ぜて文を書くが、英語はアルファベットの１種類のみを用いる。
・現代の表記においては、英語は発音とつづりが１対１で対応しているわけではないが、日本語は発音と平仮名、片仮名の表記がほぼ一致している。 など

↓

○まずは国語の学習において、言葉の働きに気付くことが重要ではないか。
（児童生徒が国語を学ぶ意味を理解することにもつながる。）
○言葉には共通の働きや仕組みの違いがあることを、児童生徒が認識した上で、国語科、外国語科の学習を行うことが、それぞれの学習に効果があるのではないか。

平成28年3月3日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料6

言語能力を向上させるための、
国語科と外国語活動・外国語科の効果的な連携の在り方について

1．資質・能力の育成を軸として、相互に連携を図る必要があるのではないか。
　その際、同じ活動を行うこと自体を連携とするのではなく、以下のｉ）～iii）の在り方が考えられるが、具体的にどのような実践が考えられるか。

ｉ）国語科で育成した資質・能力を、外国語科・外国語活動の学習に生かす場合
ii）外国語活動・外国語科で育成した資質・能力を、国語科の学習に生かす場合
iii）国語科の学習に外国語を取り入れたり、外国語の学習に日本語を取り入れたりして、それぞれの資質・能力を育成する場合

2．効果的な指導の在り方について、以下のことが考えられるが、これらの良い点や留意すべき点は何か。

・同じ題材を教材とすることにより、日本語と外国語の違いに気付かせることができるのではないか。
・目的に応じて、短時間に集中して学習することを繰り返すことで、基礎的・基本的な能力の定着を図ることができるのではないか。
・ＩＣＴ等を活用することにより、映像や音声を効果的に活用した指導や、一人一人の学習の進度に合った学習、学校外の人たちと交流する学習などを行うことができるのではないか。

など

3．各教科を担当する教員の連携が必要不可欠であると考えられるが、円滑に連携するためのポイントや課題は何か。（特に教科担任制である中学校・高等学校における連携方策について）

平成28年3月3日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料7

小学校における国語科と外国語活動･外国語科の連携について（イメージ案）

○国語科、外国語科･外国語活動において、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことを通して、言葉の特徴やきまり等を学習し、日本語と外国語の特徴や違いに気付き、言葉の働きや仕組みを理解する。

国語科（改訂のイメージ）

言葉の働きや仕組みの理解

高学年

例）事実と意見、感想を区別して話す、書く、聞く、読む

- 【文や文章の構成㋒】 ＋㋐㋑
  ･文や文章のいろいろな構成　など
- 【文字の表記、語句㋒】 ＋㋐㋑
  漢字と仮名による表記　など
- 【音声㋒】 ＋㋐㋑
  話し言葉と書き言葉の違い　など

中学年

例）理由や事例を挙げて話す、書く、話の中心を捉えて聞く、読む

- 【文や文章の構成㋑】 ＋㋐
  修飾語－被修飾語、指示語、接続語　など
- 【文字の表記、語句㋑】 ＋㋐
  ローマ字による表記　漢字と仮名による表記　など
- 【音声㋑】 ＋㋐（ローマ字の学習を通して）
  抑揚、強弱、間の取り方、音の構成　など

低学年

例）順序立てて話す、書く、順序を意識して聞く、読む

- 【文や文章の構成㋐】
  主語－述語　など
- 【文字の表記、語句㋐】
  仮名による表記、語句のまとまり　など
- 【音声㋐】
  音節、アクセント、声の大きさ　など

中学校外国語科へ

指導内容や指導方法等の連携

外国語活動･外国語科（改訂のイメージ）

言葉の働きや仕組みの理解

（高学年）

- 【文や文章の構成ⓑ】
  主語－述語、語順、指示語、接続語　など
- 【文字の表記、単語ⓑ】 ＋ⓐ
  アルファベットによる表記、単語の認識（複数文字がまとまって単語となること）　など
- 【音声ⓑ】 ＋ⓐ
  文字と音（音素の認識）の構成の関係　など

例）順序を理解して話す、聞く、単語の予測を立てて読もうとする、正確に書き写す

（中学年）

- 【単語ⓐ】（ローマ字とアルファベットの比較を通して）
  アルファベットの認識（聞いたり言ったりする）
  文字と読み方を一致させる　など
- 【音声ⓐ】
  音節、アクセント、声の大きさ
  抑揚、強弱、間の取り方
  アルファベットの発音（アルファベットの読み方）　など

例）順序立てて話す、順序を意識して聞く

◎音声（緑枠）
◎語句・単語、文字の表記（赤枠）
◎文や文章の構成（水色枠）
●話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと（青枠）
などについて、国語科と外国語活動・外国語科において連携し、指導の充実を図る。

※本資料は、国語科と外国語活動･外国語科の連携に着目して作成されたものであり、言葉の特徴や決まりに関する学習内容のすべてを示しているものではない。

国語教育と外国語教育の連携に関する効果・課題・今後の方向性に関する示唆等（例）

平成２８年３月３日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料8より抜粋

※現時点に関する内容

主な効果

○ 国語と英語の音声の違いなどに気付かせることで、英語の音声の特徴をより理解して発音しようとする姿が見られる。
○ これまで音声を中心に慣れ親しんだ語彙や表現を可視化した教材の活用を通して、児童が日本語と比較しながら、英語の文構造について気付く姿が見られる。
○ 国語科での取組を参考に英語科においても発信型の言語活動につながる指導方法や教材を作成することで、生徒のコミュニケーションへの関心・意欲や表現力の向上が見られる。特に英語に苦手意識があった生徒にとっては国語で学んだことを生かして英語で表現活動ができたということが大きな自信となっている。

課　題

○ どの段階で、語順の違いなど文構造への気付きを促すか、どの程度まで促すかなどについて検討が必要である。
○ 具体的な指導例や対応した教材、それらを活用するための研修などが必要である。
○ 小学校では、学級担任が全教科等を指導することが通常であり、学級担任が国語教育の学習内容、学習活動について熟知しており、それらを外国語教育で生かす指導力、「カリキュラム・マネジメント」力が求められる。
○ 中学校以降では教科担任制であるため、国語科教員と外国語科教員が互いの学習内容・学習方法などを理解し、それらを各教科内で生かすことができるよう教科の枠を超えた「カリキュラム・マネジメント」力が一層求められる。

今後の方向性

○ 国語教育と外国語教育の連携については、「言葉の働きや仕組みの理解」、「育成すべき資質・能力を踏まえた言語活動」の二つの観点から整理してはどうか。
○ 「言葉の働きや仕組みの理解」については、国語と英語などの言語の普遍性とともに、音声的特徴や文構造,表現方法などにおける相違性を取り上げることが考えられる。
　一方、「言語活動」については、国語の教科書や授業で扱われている聞くこと・話すことの活動動（体験を話す、尋ねて分かったことを紹介する、調べたことを発表する、聞きながらメモを取る、など）を参考に、扱う題材と適切に組み合わせながら外国語においても同様の活動を実施することが考えられる。
○ 国語教育と外国語教育のカリキュラム・マネジメントを具体的に示してはどうか。中・高校については、両教科担当教員の互いの理解を深める（カリキュラムの共有、連携のための工夫などの協働作業など）とともに、指導の順序性、扱う言語活動の形式・話題・方法などを示した指導事例などを提示してはどうか。

平成28年1月13日
教育課程部会
言語能力の向上に関する特別チーム
資料5

言語能力について（整理メモ）

1．言語能力について

言語の果たす役割は、これまでの各種会議等の議論の成果を踏まえ、以下の三つの側面から捉えることができる。

①創造的思考（とそれを支える論理的思考）の側面
②感性・情緒の側面
③他者とのコミュニケーションの側面
→言語に関する資質・能力には、この三つの側面があり、これらの側面から**「言語能力」**を整理してはどうか。

※本整理メモにおいて、「言語」は、日本語（国語）及び外国語のことを指す。広義の「言語」に含まれ得る、数字や音符などの言語記号以外の言語、グラフ、式、表などを指し示すときは、その都度、それらを明記することとする。

※言語には、具体的な発声や文字による言語活動である一般的な言語（外言語）の機能のほか、音声や文字を伴わない、思考や概念、それらの体系の獲得・操作を行う内なる言語（内言語）の機能があり、３つの側面のいずれにおいても、これらの機能が働いていることに留意する必要がある。

2．資質・能力の育成と言語能力との関係について

・子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言語を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言語を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現をしたり、他者と関わったりする力を獲得していく。このように、言語は、子供たちの学習や生涯にわたる生活の中で、極めて重要な役割を果たしている。

・言語能力は、国語科や外国語科のみならず、全ての教科等における学習の基盤となるものである。例えば、「論点整理」が提示した資質・能力の三つの柱に照らせば、以下のように考えることができる。

<u>①個別の知識・技能</u>

・学習内容は、多くが言語を用いて表現されており、新たな知識の獲得は基本的に言語を通じてなされている。
・言語を通じて、知識と知識の間のつながりを捉えて構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。
・具体的な体験が必要となる技能についても、その熟達のために必要な要点等は、言語を用いて伝えられ理解されることも多い。

②思考力・判断力・表現力等

・教科等の本質に根ざしたものの見方や考え方の獲得は、各教科固有の学びのプロセスを通じて行われる。このプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言語を通じて行われる。

③学びに向かう力、人間性等

・子供自身が、自分の心理を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力（いわゆる「メタ認知」）の獲得は、心理や思考のプロセスの言語化を通じて行われる。
・言語を通じて他者とコミュニケーションをとり、相互の関係を築いていくことにより、思いやりや協調性などを育むことができる。

→言語は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤として重要な役割を果たしており、言語能力の向上は、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方を左右する、重要な課題として受けとめる必要がある。

３．他の様々な資質・能力との関係について

○コミュニケーション能力との関係

・コミュニケーション能力については様々な定義があるが、文部科学省の有識者会議においては、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義されている。
・この定義を言語の果たす役割に照らして整理すれば、コミュニケーション能力については、③他者とのコミュニケーションの側面を軸としつつ、他の側面（①創造的思考（とそれを支える論理的思考）の側面、②感性・情緒の側面）にも支えられた能力として育成される必要があることが分かる。
・コミュニケーション能力は、話す・聞く・書く・読むといった言語活動のほか、非言語による伝達手段（イメージ、音、身体）も含めた広範な活動に関わるものである。このため、「コミュニケーション能力」の向上には、言語能力のほか、非言語能力の向上も必要である。

○非言語能力との関係（イメージ、音、身体）、言語の限界について

・人間のコミュニケーションや創造的思考などの諸活動は、言語によってのみ支えられているものではなく、言語以外にも、形や色などのイメージや、身体の動き、音の強弱やリズムなどの多様な手段が関係している。
・こうした多様な非言語的な手段による諸活動に関する資質・能力を、言語能力と相互に関連させながら高めていくことは、感性や情緒等を豊かなものにしていくことにもつながる。このため、学校教育を通じて、芸術教育や体育等の充実を図ることも不可欠である。

○言語活動と体験活動との関係

・言語能力の育成のためには、実際に言語を用いて行う言語活動を各教科等において充実させるとともに、体験活動を通じて、実社会の中で様々な事象に触れたり、多様な他者との交流の機会を持ったりすることも重要であり、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の中で、それらの充実を図っていく必要がある。